

全国タルク協議会

提出資料

タルク製造・輸入御者

全国タルク協議会要望書

資料 1 SDS（イメリスグループ）（委員のみ配布）

資料 2 Harlan 資料（委員のみ配布）

資料 3 関係論文（委員のみ配布）

2016 年 2 月 25 日

化学物質のリスク評価に係る企画検討会ご参加各位

労働安全衛生法施行令別表第 9 の新規候補物質の検討に関する要望書

平成 27 年 9 月 1 日付「化学物質のリスク評価に係る企画検討会報告書」において、“タルク”は「令別表第 9 への追加を引き続き検討すべき化学物質」として選定されております。本件に対し、全国タルク協議会ならびにタルク製造・輸入業者の総意として以下の要望を申し上げます。

EU、米国向けタルク・タルク製品の SDS 記述内容

- 1) OSHA : リストから除外。
- 2) ACGIH : 「A4 not classified as s human carcinogen」 との記述。
- 3) IARC : ボディパウダーを会陰部に使用した場合の特殊な吸収経路による発がん性の可能性は否定していない（グループ 2B）が、工業的な作業環境においてはそのようなケースは考えられない。一方、「タルクの吸入はその発がん性が分類できない（グループ 3）」と結論。
- 4) NTP: リストから除外。雌雄ラットに対する 2 年間吸入試験において 18 mg/m³ 濃度で発がん性の兆候が認められたが、マウスに対しては何ら因果関係は証明されていない。（NTP TR-421）
- 5) 「ラベル」 要求はされていない。

上記の事実および 50 年以上に及ぶ産業界の使用実績により、アスベストを含まないタルクに関しては、現在の全ての使用方法において発がん性のみならずあらゆる有害性との因果関係を証明する事例はなく、全ての専門家のレビューにおいて、「いかなる分類も推奨されない」と結論付けられております。

更に、世界中のタルク業界で使用される SDS などとの国際的整合性も併せて、日本国内で別表第 9 への収載ならびに「ラベル」 要求は妥当ではないと思われます。

また、タルク製品は、タルク業界の自主的な粉じん曝露対策および各種安全データでの注意喚起により、使用者も防塵マスクなどの適切な粉じん管理下で問題なく使用されており、防塵マスクの着用を超える過剰なリスク喚起は多くの使用者、とりわけ、自動車・製紙など生活に密着した重要産業において使用者の作業性の悪化・経済的負担を多大にするだけでなく、風評被害により、中小企業の集合体であるタルク業界においては、一気に衰退の一途をたどる危険性をはらんでおります。欧米のタルク業界においても、日本向けに輸出しているタルク製品に対するラベルの可能性については非常に危惧しており、正しいご判断がなされることを切に願っております。

以上、宜しくお取り計らい下さいますようお願い申し上げます。

全国タルク協議会

タルク製造・輸入御者

一同

全国タルク協議会 構成会社 14 社（50 音順）

イメリス スペシャルティーズ ジャパン株式会社

キハラ化成株式会社

株式会社勝光山鉱業所

ソブエクレイ株式会社

太平タルク株式会社

竹原化学工業株式会社

有限会社田村滑石工業所

東方商事株式会社

西日本貿易株式会社

日本タルク株式会社

林化成株式会社

株式会社福岡タルク工業所

富士タルク工業株式会社

松村産業株式会社

会員外タルク製造業者 2 社

浅田製粉株式会社

カミタルク株式会社

合計 16 社

（添付資料）

資料 1：

イメリスグループ（世界最大のタルクメーカー）のタルク製品の SDS

資料 2：

Harlan Project C74445, Talc (Asbestos-Free) Evaluation of the Carcinogenic Potential and Potential Target Organ Toxicity in Humans, Expert Statement

安全性試験機関（スイス Harlan 社）毒性学の専門家の見解として、2010 年 4 月 16 日付「タルク（アスベストフリー）、ヒトにおける発がん性の可能性ならびに可能性のある特定臓器毒性」に関する報告書を添付いたします。多ページにつき、関連する部分のみ要約いたします。

(P8-9結論部分 要約)

アスベストを含まないタルクの吸入は、動物への作用および疫学的観点に基づいて発がん性とみなされるべきでなく、いかなる分類も推奨されない。過去の会陰部への使用に関するデータもパウダーと卵巣がんの相関も不十分で用量作用も認められない、この相関は通常的作用なのかどうか、使用されたタルクがアスベストを含んでいたのかどうか、いまだ不明のままである。生物学的可能性および当時のタルクのヴァギナから卵巣へ移行した証拠が不十分であり、アスベストを含まないタルクの会陰部用途と卵巣がんの相関は考えにくい。

反復曝露による特定標的臓器毒性（STOT）についても、アスベストを含まないタルクに対してはいかなる分類も推奨しない。動物試験で認められた作用は不特定粒子および肺への過剰曝露によるもので、現在の科学的見解ではラットはこのような作用にもっとも敏感と言える。これらの作用は不特定であるため、ラットに認められた作用は必ずしも人に当てはまらず、従って、この単独のデータによる分類は正当化されない

ヒトに対するデータによると、STOTについては何の分類も必要でない。十分な相関は確立されていない何らかの作用は、動物の線維形成性の作用というよりはむしろ、不特定の粒子によるものと考えられる。

タルクは産地は精製工程によってさまざまな濃度の副成分を含む製品であり、副成分の存在と分類への影響は産地によってケース毎に評価されるべきと考える。

資料 3

International Journal of Toxicology

2010年に発表された「Safety Assessment of Talc as Used in Cosmetics」は化粧品への使用の観点から様々な曝露・吸収経路からの安全性検証を行っている、その結論（P123 S）によると、Cosmetics Ingredient Review Expert Panel（化粧品原料レビュー専門委員会）は、「タルクは現在の使用方法、安全のアセスメントに記載された濃度においては安全である」と結論付けている。、

以上